北星学園大学文学部北星論集第50巻（通巻第57号）（2013年３月）・抜刷

【翻　訳】

「学生が将来平和を作り出すための
リーダーシップを発揮するために，
ブレズレン派の大学がなすべきこととは」

（米国マンチェスター大学教授　グラディス・E・ミュアー）

片　岡　　徹

翻　訳

「学生が将来平和を作り出すためのリーダーシップを発揮するために，ブレズレン派の大学がなすべきこととは」

（米国マンチェスター大学教授　グラディス・E・ミュアー）

片　岡　　徹

（解説）

この翻訳は，1948年という第二次世界大戦が終了した３年後に，マンチェスター大学において米国で初めて誕生した平和学プログラムの初代所長であるグラディス･E･ミュアー教授が，1947年にブレズレン教会の集まりで報告した原稿“The Place of the Brethren Colleges in Preparing Men and Women for Peace Leadership”の翻訳である。平和学プログラムを設立するために，ラ・バーン大学（University of La Verne：マンチェスター大学もラ・バーン大学も北星学園大学の姉妹校である）から移ってきた歴史学者であるミュアー教授が，いかなるビジョンを持ってその創設に関わろうとしたのかが，ひしひしと伝わる内容であり，平和学の歴史を知る貴重な資料である。

この原文は，1989年に発行された「マンチェスター大学 平和学研究所紀要（Manchester College 1989 Bulletin of the Peace Studies Institute)」に再掲されており（pp.9～19），現在はマンチェスター大学のホームページ上で読むことが出来る（http://palni.contentdm.oclc.org/cdm/compoundobject/collection/mapplow/id/2549/rec/25　最終アクセス日 2013年１月10日）。なおこの紀要はミュアー教授に捧げる内容（In Dedication of Gladdys Esther Muir 1895-1967）となっており，ミュアー教授の報告について振り返る論考が数多く掲載されている。

ミュアー教授の原稿を翻訳するに当たり，マンチェスター大学で現在平和学プログラムの所長を務めるキャサリン・ブラウン准教授から許可と激励を頂いた。ここに深謝する次第である。

（翻訳）

今日の教育機関に対して課せられている最大の責務というのは，社会が崩壊しつつある中で，私たちの上に重荷となって押し寄せる潮流を止めることが出来ていないという事実を直視するという責務です。すなわち，社会状況を把握できるような学生を世に輩出することが出来ず，そのあるべき姿についてはっきりと主張することも出来ず，仮に出来たとしても，人々をそのような方向へと向かわせることが出来ないという事実を直視するという責務なのです。キリスト教主義の大学は，このような批判から免れているのだと主張することは，どう見ても出来ないのであり，ましてやブレズレン派のような歴史的平和主義教会（historic peace churches such as the

キーワード：Gladdys E. Muir，Church of the Brethren，Manchester College，Peace Leadership，Spiritual Leadership

Brethren)であれば,なおさらそうなのです。にもかかわらず,現代世界において,このような要求に応えるために役割を果たすべき教育機関の無能力さは明らかです。しかし,予言的な声がないわけではないのです。例えば,宗教だけではなく,歴史,哲学,科学そして芸術など,様々な領域がそれに相当します。特筆すべき点は,それらが諸問題に対して色々な考え方を採用しながらも,現在の社会における危機やその原因に関しては,数多くの合意(so much unanimity)が存在するという点です。歴史学者,科学者,そして哲学者は,科学の領域における目覚しい業績や生活手段の向上にも関わらず,私たちの文化様式という精神的,倫理的な要素の中には,それに対応する文化の遅れ(culture-lag)が存在すると言っています。例えば,生活の手段が多様化する状況にあっては,私たちは生活の目的をほとんど見失っており,もしも私たちがそのような状況を遅々として改善しないのであれば,私たちは彷徨うばかりなのです。この議論の中で,現在もっとも重要な業績のひとつとして認識されているアーノルド・トインビー(Arnold Toynbee)の著書「歴史研究(Study of History)」によれば,20世紀における西洋社会の実情は,18世紀の啓発された状態(enlightment)がその精神的な不十分さ(spiritual inadequacy)ゆえに引き起こされた分裂の状態(disintegration)である,と診断されています。その啓発の状態とは,進歩の理論(the theory of progress)が進展した状態であり,合理的で科学的な手段を通じて獲得された真理の発見に大いに依存するという,一種の避けがたい進歩を意味していたのです。この概念は,中世の時代を席巻していた「神の都市(City of God)」というこれまでの概念から大きく書き換えたのです。近年の戦争を鑑みれば,この進歩という概念が崩壊しかける時に,人は目的を見失う(adrift)ように感じるのです。現代の人間は,「いかにして」自らの文化に対する課題に応答していくのでしょうか。人間とはこのように考え,しかしながらあたかも走ろうとしますが,どの方向へ行くべきなのかが分からないために,黙って立ち尽くしている(stand still)だけなのでしょうか。人間は走り始めて,そして人生とは,永遠の人生とは,と目を眩いほどの光にさらしながら,そして足をはるか離れた小門に向けたまま,嘆き続けながらも走り始めるのでしょうか。

私はこの問題について,かなり異った角度から考察してみようと思います。フランスの生物学者であるルコント・デュ・ヌイ博士(Lecomte Du Nuoy)による「人間の運命(Human Destiny)」という本をその手掛かりとしていきたいのです。この本は20世紀におけるもっとも重要な書物のひとつとして科学的な権威を牽引する代表作の一つとして位置づけられています。私たちの時代における科学を強調する点について,彼は次のように述べています。

もしも知性というものが,道徳観という直感や合理的な認識(the intuitive or rational perception of moral values)を必要としないのであれば,その知性だけでは危険である。〈中略〉このような主張は,世界が原子爆弾について知識を得るはるか前からなされていたのであり,見事な方法で私たちの知性の意味を描写していたのであった。人々は突然,科学による見事なまでの勝利というものが残忍にも我々人類の安全保障を脅かす存在になる,ということを悟らされるのである。人類の歴史において,初めて純粋な知性と価値観(pure intelligence and moral values)が対立するということが,生と死の問題(a matter of life and death)となったのである。

ヌイ博士は精神の完璧さ(spiritual perfection)を,人類の目標として考えるのです。彼はま

た，イエス・キリストが精神の純粋さに言及して天国を約束する時に，イエス・キリストは優柔不断な人々を念頭に置いていたのではなく，直感を知性よりも優先させ，そして人間の運命において暗黙の了解の上で無意識に信仰を持つ人々のことを念頭に置いていたのだと説明しているのです。

ヌイ博士は生物学者であり，彼自身は18世紀の賜物である啓発された状態という概念からは程遠いはずなのですが，しかしながら進歩という考えに傾く傾向にあります。しかし，彼の結論は社会学者であり，社会の循環理論（the cycle theory）の修正を試みた著書「社会と文化のダイナミクス（Social and Cultural Dynamics）」で知られるソロキン（Sorokin）によっても部分的に支持されているのです。彼は，私たちの文化の分裂は主として真実のある特定の側面を過度に強調し，そして他の部分を無視するために起きているためだ，と言っています。私たちの場合で言えば，それは私たちの文化が「素晴らしい」文化であり，それ以外に知覚されるような価値観は認識されないためだ，ということになります。過去の文化に対する保護主義や文化の活性化というのは，経済的，政治的，遺伝子的な要因の操作によって起こるというよりはむしろ，人間の内面に精神的意義を与えること（spiritualization of mentality）や，宗教を仲介として与えられた社会関係の行動変化や向上という社会化を通して起こるのです。

例えばジェラルド・ハード（Gerald Heard），アルドゥス・ハクスリー（Aldous Huxley），ダグラス・スティアー（Douglas Steere），シェルダン・チェイニー（Shelden Cheyney）など，文化人類学，宗教，哲学そして芸術という領域の人々が，この診断に役立つかもしれません。もしもこれらの人々がすべて神学者（theologians）であったのならば，私たちの社会が精神的に成長しなければならない，さもなくば滅びなければならない，という彼らの主張や結論には驚かないでしょう。しかしながら，あれほど異なる出発点から検討されているにもかかわらず，きれいに同じ場所へ到達するということは，かなり驚くべきことです。恐らくは，このような結論の趣旨というのは，エルトン・トゥルーブラッド（Elton Trueblood）によって言及されたものほど，的を射たものは他にはないでしょう。彼は大変小さな冊子の中で，著書のタイトルでもある「現代の人間の困難な状況（Predicament of Modern Man）」について，このように述べています。

衝撃的な真実とは，目的に関する私たちの知恵というものが，手段に関する創意や工夫とは一致せず，その状況が続くのであれば，その状況は私たちを滅ぼすのには十分な状況であるかもしれない，という真実である。まさに地球上に技術が行きわたる状態が出現するかもしれない（the technical conditions for the oneness of the globe）というまさに歴史的な今という瞬間において，もしもこの状況が祝福すべきものであるならば，私たちは，本来は必要とされる道徳的な条件を痛ましいほどに欠いているのである（woefully lacking in the moral conditions）。

彼は，このような技術的な進歩を非難しているのではなく，人間が良き人生や良き社会をもたらすために科学的な知識と技術的な業績というものを両立出来ていないことを非難しているのです，と明確に主張しています。重要な問題とは，彼が言うには精神的な問題（the spiritual problem）なのですが，ほとんどの人々はそれには未だ気づいてはいないという悲しい真実がある，という問題なのです。

もしもこのような思慮深い人々によって到達された，現在の世界が最も必要としているものが，精神的なリーダーシップ（spiritual

leadership）であるという結論が，大部分において真実であるとすると，ブレズレン派の大学が世の光となり，社会にとっての影響力（a leaven for society）でありたいならば，私たちはその中に教育方針として採用すべき方向性に関する手掛かりを探し当てることが出来るでしょう。もしも大学が学校や教会で働く人々を育て，または戦略的に様々な政府や国際機関で働く人材を輩出することに関心を持つのであれば，それも一つの方針ではあります。しかしその一方で，もしも現在のように数多くの課題を抱える世界において（in this troubled world），人生の意味や自身を他者のために奉仕をする際に必要な知恵や誠実さ（wisdom and integrity）という先見性を持った人を育てることに大いなる関心を持つのであれば，それはまた別の方針となります。

恐らくこの問題から自然と湧き上がる最初の問いは，次の通りである。何が精神的なリーダーシップを構成するのであろうか。歴史に照らしてみれば，老子（Lao-Tsu），イザヤ（Isaiah），ブッダ（Buddha），プラトン（Plato），聖パウロ（St. Paulo），聖アウグスティヌス（St. Augustine），聖フランシス（St. Francis），ジョージ・フォックス（George Fox）など，先見性を持っていた人々とは，普通の人々よりも，より良い物事の見方をすることが出来た人々でした。それぞれが生きていた時代において，彼らは各々の文化に何が不十分であるのかを見極め，その欠けていたものを社会の中へと吹き込む手助けをしたのでした。彼らには社会の目標に対する明確なビジョンがあり，人々をその目標のために突き動かす力を持っていました。彼ら全員が正式な教育を受けてきたわけではありませんでしたが，しかしながら自己体験に基づいた生き生きとした宗教的な経験を有していたために，未来を予測する予言者となり得たのでした。もしもこの予言的な能力や創造性に満ちた才能というものが正式な教育よりも直感力と密接に関連があるのであれば，この事実自体が，大学に不足しているものや有している資源，そしてその機能について学ぶことに関心を持っている人々にとっては，重要な指摘となります。もしも私たちの社会の状態が，何よりもまず精神的なリーダーシップを求めているのであれば，次の問いが自然と湧き上がってきます。私たちが必要としているこの精神的なリーダーシップという概念は，リベラルアーツの大学において長い時間をかけて培われてきた教育目的と，いかなる点でどのように異なっているのでしょうか。それは厳密に言えば，精神的なリーダーシップではないのではないでしょうか。同時代に生きるある教育者は，「文化とは先見性の問題であり，また生きるということに最も高い価値があるのだと明確に理解をしているのかどうか，という問題なのである。（中略）文化的な教育は道徳的，社会的，市民的，そして宗教的なリーダーシップを生み出すのである」と述べています。

確かに，現代のリベラルアーツの大学における基本的な考え方が，良き生を享受する手段として，バランスの取れた教育という考え方を思いついたギリシャの考え方に由来している，ということはそうなのかもしれません。しかしながら，彼らは哲学を重要なものと評価しており，また宗教学や倫理学を極めて重要なものとみなしていました。中世の時代でさえ，古典的な文化の衰退後も，その当時の教育者たちは，知的な探求を目指した宗教的な生活とコミュニティーにおける力仕事の奉仕活動を組み合わせることによって，バランスの取れた教育を主張していたのです。その時代の学生は，人生の目標に対して熱心に取り組んでおり，今日の学生よりも，より一体化した生活を送っていたと考える研究者もいるほどです。しかしながら，現在のリベラルアーツの大学は，その先輩方とは状況が全く異なります。人類について研究すると

いうことが，カリキュラムにある宗教学や哲学に取って代わり始めるという，まさに教育の宗教からの分離（the secularization of education）によって，道徳的相対主義（moral relativism）という考え方が異なる文化を学ぶということから出現してきたのでした。産業化の到来もあり，大学で強調される内容が再び人本主義から科学へと（from humanism to science）移行していったのでした。客観性に重きを置いた（stress on objectivity）科学的な手法の発展は，大学が道徳的な価値を議論することから，さらに後退させたのでした。さらには，大学における選択科目制度の発展にともなって，現代のリベラルアーツの大学は，当初の目的であるバランスの取れた一体化した人格を目指す学生をほとんど輩出しないようになってしまいました。また，教育の宗教からの分離によって，「良き社会」という目的は，恐らくは現代の学生にとっては唯一の目標である「民主主義」という言葉で描写されることを除いて，劇的に衰退の一途を辿っていきました。民主主義のための教育ということが，それが究極的な問い（the ultimate questions）を取り扱うことがなく，むしろ政治または社会システムにおける手続き上の諸問題（matters of procedure in a political or social system）を取り扱うため，私たちの教育上の努力目標として十分な目標たり得るのかどうかは疑わしいということが指摘されています。少なくとも我が国における手続き論は，キリスト教の教えの直接的ないしは間接的な結果であるという倫理的な理想や姿勢を仮定していますし，また当然のこととみなしているのです。私たちの民主主義の創設者たちは，自らのことをトーマス・ジェファーソン（Thomas Jefferson）のように「自由に物事を考える人々（free thinkers）」と称する人々でさえ，キリスト教による倫理的な理想で心が満たされていたのです。アメリカ史を専攻する数多くの学生は，この民主主義というシステムはアメリカ史の後半の50年よりも前半の50年においてよく機能したと言うだろう，と私は考えています。恐らく，例えば限られている領土の範囲や共通の背景を持つ人々の同質性など，このような事実を説明する要因は数多くありますが，その一つの要因もまた，極めて宗教的であった時代に蓄積されたキリスト教の力があるように思います。明らかに，私たちがこの蓄えに頼ることが出来れば，私たちはかなり上手く事を運ぶことが出来たでしょう。しかしながら，私たちの生活において非宗教主義が進むにつれて，市民の役割として必要とされる人間の人格への高い尊敬の念，無欲さ，そして誠実さが，かつてのように想定されなくなり，そして当たり前のこととみなされなくなっているため，その事は更に難しくなってきているのです。ソロキンは，このような倫理的な考え方や姿勢が契約関係という成功体験に根差していると指摘しています。西洋社会では，このような契約関係が，国内であれ国際的であれ，家族，経済，そして政治と私たちの全ての組織を形成しているため，このような考え方の教化を拒むことは，西洋文明の基本構造にとって致命的なことなのです。これらの事実を考察し，現代世界で必要とされる精神的なリーダーシップを生み出すために，今日のリベラルアーツの大学の特性を考察すれば，現在の大学がこのような構造の中で成り立っているので，私たちは期待をかけることがほとんど出来ないのです。精神的な力を生み出すためには，何かをしなければならないのです。ソロキンはまた，そのようなリーダーシップを生み出すためには修正（revision）の必要性を示してもいます。その必要性とは，次の通りです。

（1）近年において，特に科学への関心の高まりとともに激しく締め出され，またはほとんど強調されなくなった哲学，宗教学，そして

倫理学に代表されるような削除され，または無視されてきた学問を，再度教育の重要な要素として盛り込むことにより，かつてのようなバランスの取れた教育を復活させる必要性

(2) 自然科学に遅れを取ってきた社会科学の領域を活性化する必要性

新たにこれらを強調するということは（特に(1)を），キリスト教コミュニティーやキリスト教主義の大学に対して，今まで以上に大きな責任を課すことになることを認識しなければなりません。というのは，宗教学や哲学のみが究極的な目的や目標について述べることが出来るのであり，そしてキリスト教主義に関連する大学のみが自由にカリキュラムの中にそのような科目を配置することが出来るからです。実際に，人生の目的を熟慮することから決別し，それらを最低限にまで減らした教育機関はどこであれ，私たちが現在求められているニーズに応えうるかどうかは疑わしいのです。この点については，ブレズレン派の大学は特に宗派を持たない大学や州立大学とは異なりますが，ある程度までは私たちもリベラルアーツの大学の中で見てきた同じような一般的傾向を反映しているのであり，もしも私たちが精神的なリーダーシップを生み出したいと考えるのであれば，全般的に修正を施す必要があるのです。

どのようにしたら，ブレズレン派の大学はこのような使命を遂行することが出来るのでしょうか。そしてどのようにしたら現在という時代において，精神的なリーダーシップを生み出すという必要性を満たせるのでしょうか。少なくとも，この報告にはそのための出発点（a starting point）が書かれています。ブレズレン派の大学には，人生の目標や善と悪の問いを扱う宗教学や哲学の授業があります。州立大学の学びとは異なり，ブレズレン派の大学は，少なくとも学生に履修させたいと考える必修科目を自由に決めることが出来ます。聖書学や聖書の教義，また宗教教育や哲学については，様々な授業が提供されています。必修科目の数はさほど多くはなく，6時間から12時間です。クエーカーの教育者たちのように，ブレズレンの教育者たちは，もし望むのであれば，人生の目標とは人間社会という集合的な意思にあるのではなく，神の意志の中にあるのです，と自由に言う事が出来るのです。しかしながら，真の問題とは，すべての教員が分かっているように，単に授業を提供し，必修科目を作り，そして目標を設定するだけで物事が解決するわけではないということなのです。この領域において，もしもブレズレン派の大学の関心が，履修便覧に掲載された科目によって判断されるということより，むしろこの領域で選択する時間数や卒業生の職業選択ということによって判断されることがあれば，私たちは，宗教学や哲学や倫理学が私たちが想像するほど教育プログラムの中で大きな役割を果たすことにはならない，ということを認めなければなりません。さほど多くの学生が必修科目以上に履修することはないかもしれませんし，ほとんどの学生が直接的にはそのような領域に関心を持ってはいないかもしれません。ブレズレン教会における牧師や宗教的指導者に対するニーズはあるかもしれませんが，ほかの領域と比べればこのような職業を選択するために入学する学生の割合は，少ないと言って良いのです。トゥルーブラッドが言うように,「もしも私たちに知恵を獲得する用意がなされているならば，私たちは，輝ける学生たちを精神の再構築（spiritual reconstruction）へと励むように激励するべきである。私たちは，何か新しい機械のためというよりはむしろ，学生の信仰が成熟するために手をかけて熱心に伝えていくこと（the elaboration and promulgation）というためにも最善を尽くすべき」なのです。

恐らくはブレズレン教会の大学の状況は，

この点において他の大学よりは思っているより良い状況ではあります。が，さらなる改善が必要です。たとえその問題が解決されたとしても，さらに根本的な問題が残ることになるでしょう。学生が哲学や宗教学の授業を取っているために，その学生が生きた宗教や人生哲学を持っていないこともありうるだろうし，その学生が倫理学の授業を取っているからと言って，必ずしも適切に倫理的な姿勢を育んでいるとは限らないのです。ブリントン博士（Dr. Brinton）は，大学における教育課程というのは，学生に分析や批判をするよう教えるが，学生が自らの知識を統合することにはさほど手を貸してはいない，と指摘しています。その結果として，無気力となり，効果的な行動を取ることが出来なくなるような数多の混乱するような考え方に直面して，学生はしばしば大学を去っていくのです。学生が考え方を体系化する方法については，人生の目標ということでさえ知らされていないのではなく，学生がこの種の問題に関して，それに対して満足のいくような解決策を自分自身で発見するために，各自で内面の努力をするように励まされていないだけなのです。ブレズレン派の大学であるラ・バーン大学では，ある取り組みが何名かの学生の協力のもとで実行されました。個人と社会における人生の目標に関して，オリエント期における古代の予言者に始まり，20世紀における偉大なる哲学者に至るまで，すべての時代における偉大で著名な人々がどのようにして解釈してきたのかを学生に考えさせる授業です。それは以下のような内容を含む授業でした。学生は普通の小さな大学に通っていますが，この事実は教師たちに対して制限にはなることはなく，むしろ学生がその事実をありがたく思うような方法で授業が展開されていきました。というのは，学生たちがもしも望むならば，単に本を読むというよりはむしろ，実際にソクラテス，プラトン，聖アウグスティニュス，聖フランシス，そしてエックハルト（Meister Eckhart）などを身近に感じ取ることが出来たのでした。言うまでもなく，その授業は必要な条件を満たし，かつ力があると思われる２，３名の学生に限定されていました。教員と学生は一緒になって人生の目標という問題と格闘し，人生の探求に関する授業においては，それぞれが各自で十分な考え方を提示したのでした。また，形式的にはそれぞれが異なる宗教的な立場を取っていましたが，神の存在や基本的な道徳的原則に関してある共通した信念があると発見したことは，彼らの多くにとっては満足の行く根拠となったのでした。

道徳的な相対主義を受け入れるということは，最も思慮深い何名かの現代の哲学者によれば，私たちの社会を崩壊へと導く主たる理由となる，と考えられています。このような道徳に関する考え方は，前述したように無頓着な異文化研究から増大していきました。しかしながら，「世界宗教」という授業で目覚しい成績を収めたロバート・バロウ（Robert Ballou）という学生は，宗教的な生活の結果として追求された状態の相違点にも関わらず，偉大なる全ての世界宗教と呼ばれる宗教は，個人の心や考えの純粋さによって，人間とは本質的に一体的なものであり，人は他者と共にあり，そしてすべては神の働きと共にあるという認識を持つことから湧き出る人間の同胞に対する良き働きと高潔で優しい心からの友情から成り立っているのだ，と指摘しています。同じような考え方は，ホッキング教授（Professor Hocking）の著書「哲学への序章（Preface to Philosophy）」でも表明されています。またロバート・シャファー（Robert Shafer）による世界宗教の研究でも表明されています。ある種の道徳の絶対性があり，人間が直感的に，何らかの共通する宗教的および倫理的な信念へと導かれることがあると述べる人も少なくはありません。人間

という本質的に一体的なものであるという認識と人間の生命という神聖さは，これらの一例なのです。この事実が暗示することは，ブレズレン派の教育者にとって非常に重要な意味を持つものです。というのも，もしもブレズレン派の教育者が学生にこれらの事実を伝える授業を設けることが出来ないならば，彼らの信仰にとって本質的な教えの一つをありがたく感じる機会の増加を失うだけではなく，現代の世界において，学生に対して強くて安定的な影響力として奉仕する，ある種の深い宗教的な信仰を築き上げるための機会を失うことにもなるからです。いくつかのブレズレン派の大学では，当然のことながら生ける世界宗教という授業を提供しています。

ブレズレン派の大学は全てイエス・キリストに関する基本的な教えに関する授業を用意しています。ブレズレン派の大学が集まったマンチェスター大学で開催された会議では，「全ての相対主義を乗り越えて，躊躇することなく私たちは真実を追求していきましょう。私たちはキリスト教の教えこそが数多くの人々が受け入れる生活様式であると理解しています。私たちは謙虚にそのような偏見を受け入れますが，しかしキリストこそが『私たちの道であり，真実であり，そして人生である』ことを確信しています」という声明が出されました。またその会議は，「全ての大学生が，少なくとも１年間はどのブレズレン派の大学ででも構わないので過ごすことを可能にします。そうすることで，学生は（１）キリスト教の歴史の本質を学ぶことができ，（２）キリスト教の人生哲学を学ぶことができ，そして（３）ブレズレン派が考えるキリスト教の倫理を学ぶことが出来ます」ということを推奨しました。

もちろん，人は単に宗教に関する授業を受けるだけで，宗教的になるということではないことは分かっています。ましてや，聖書に関する授業においても同様です。宗教がそもそも教えられることが可能かどうか，という問いも存在するほどです。宗教学における授業は，有益な情報を提供はしますが，宗教的な経験を提供することはできません。特に後者に関しては，恐らくは大学が取ることが出来る最善の策は，このような経験を可能にするような好ましい条件を作り出すということです。最も重要なことは，恐らくは（１）礼拝という定期的な機会を提供したり，（２）生き生きとした宗教的信仰を持つ教員との交わりを持ち，特にまさに彼らの宗教的経験が現実のものとして納得がいくような証言となる教員の生き様を提供することによってなのです。

礼拝のための好ましい機会を提供する際に出てくる問題は，全ての大学が多かれ少なかれ不十分な方法で取り組んでいるという問題です。それは，ある学校では日中に開催される通常はチャペルタイムを設けることで解決されます。他の学校では，一週間に４，５回開催するという学校もあります。近年におけるブレズレン派の大学の傾向としては，教員による話は外部スピーカーによる話を祈祷（聖書，讃美歌，祈祷）に加えるというものです。多くのプロテスタント系の教会と同様に，礼拝が中心（worship-centered）というよりも説教が中心となる（sermon-centered）チャペルでの礼拝と言ってもおそらくは過言ではありません。数多くの大学キャンパスにおいて定期的に挙げられるチャペルへの不満というのは，話し手に強調点を置いたがために，チャペルでの礼拝が単なる別の授業のようになっているという事実にもよっています。または，チャペルに集う高校や短期大学からやって来る学生は，主として楽しく堅苦しくない話し手を好み，しばしばチャペルでの礼拝の真の意味を理解していないという事実が，チャペル委員会が信仰を促すような礼拝の形式から良い結果を手にすることを難しくさせているのです。学生の精神的な成長に

寄与するために，真の礼拝経験を可能にするようなチャペルを計画して実行することよりも，学生の意見に屈することは簡単なことです。もしもチャペルの問題が成功裏に解決することが出来るのであれば，さらに学生と教員の側に礼拝への「要求」が湧き上がるような環境を作り出すという問題について，私たちはしっかりと考えていかなければならないでしょう。恐らくは，この問題に対する最も妥当な解決策は，大学がチャペルの責任者（dean of the Chapel）として仕えるのに最も適切な精神的なリーダーたる教員を指名する，ということでしょう。知的な能力を有する人は，内面が生き生きとしており，精力的で説得力があるでしょう。精神的なカウンセラーとして仕えることで，集団や個人として礼拝への参加の仕方を学生や教員に教え，そして彼らの精神的な成長を育む手助けをすることが彼の役割になるでしょう。偉大な宗教的リーダーや聖徒たちにとって，熟考，精神的省察，そして祈祷が長い間精神的な成長にとっては不可欠な要素であるとみなされてきました。中世の時代の学校では，献身的な生活という修養が主要なテーマでした。今日のような世俗的な教育にあっては，宗教と教育が乖離しており，キリスト教主義の大学でさえ，宗教と教育の関係を促進するような意識的な努力はほとんどなされてきませんでした。このような状況から精神的なリーダーシップをいかにして出現させるかは難しいことなのです。

教師との交わりは，ブレズレン派の大学が精神的な成長を育む際に活用出来る別の有効な資源となりえます。しかしながら，私たちの経験は，もしも授業の規模が小さく，リラックスする雰囲気でもなく，そして教員が学生自身を巡礼者の気持ちにさせるような取り組みがなされないのであれば，学生を人生という大きな意味やその他の特定の諸問題について，教員とともに議論することを励ますようなある種の教師との関わりというのは，授業の中では通常は起きえないことを示唆しています。時々，大学が小さいために自動的に親しい教員と学生の関係を構築する良い環境にあると思われています。そのような関係性はしばしば築かれてはいますが，各学科には教員は２，３名しかいないので，授業は小さな大学においても過度に大規模なものとなるのです。教える負担が時には非常に重いものとなり，非常に望ましいとされるくだけた関係を授業で作ろうと思っても，別の会合などで時間を取ることが難しくなるのです。もしもブレズレン派の大学が比較的小さな規模であるという有利さを活用しようと思うのであれば，これらの事実を考慮に入れるべきです。大学の規模が名声を高める，という財政支援者の側から提起される誤った信念ですが，財政上の資産の必要性という議論は，しばしば大学を故意ではないであろうが重要な資産の一つを犠牲へと導くのです。ブレズレン派の大学の教員が精神的な成長を促す有効な資源となりうるのであれば，教員は研究によく励まなければならないだけではなく，精神的な活力を持っていなければならないでしょう。歴史であれ，科学であれ，宗教であれ，芸術であれ，全ての教員は宗教を現実化する証言者でもあり，それを否定する証言者にもなりうるのです。現在の教員の多くは，教員としての訓練を，学術的な雰囲気が宗教に敵意がないにしても無関心であるような科学を強調する時期に受けています。そのように強調されてきたために，本来はさほど科学的な領域でないものであっても，客観性や研究者の人間観に影響を与え，科学的な手法に重きが置かれてきました。宗教の領域でさえ，アレン（Allen）が著書『昨日だけが（Only Yesterday）』で，「神はアメリカ学術学会のメンバーにならなければ尊敬の念は得られないだろう」と言うほどです。現在のような危機を目の前にして，数多くの教員はそうでは

ないと望みはしますが，大学の教員とは，基本的な直感というものを疑うように教えられてきており，率直に言って感覚を超えて到達した真実の妥当性についてしばしば疑いをかけるのです。精神的な感受性や意識に欠いている人々がどのようにして精神的なリーダーシップを生み出すことが出来るのでしょうか。難しいと思います。ダグラス・スティアー（Douglas Steere）は，このことが現在の精神的なリーダーシップの問題に関する最も重要な側面であり，まさに教員の側の大いなる救いの経験こそが，精神的なリーダーシップを生み出す上で重要な要因となる，と考えています。

この問いは，自然とブレズレン派の教育者が考えなければならない次の問いへと導くのです。ブレズレン派の大学の目的は，一体いかなる点で他の宗派の大学やリベラルアーツの大学の目的と異なるのでしょうか。

ブレズレン派の大学は，キリスト教の環境の中でリベラルな教育を施すために，各自の声明に従って創立された大学です。ブレズレン教会は，新約聖書こそが必要であると考え，そしてキリスト教の生活様式がいかなる教義の声明よりも重要である，と考えているのです。このようなブレズレン派の解釈は，温かな交わり，質素な生活，禁酒，経済的な協力，特に同胞意識と平和といったように，人生のある価値観や様式を強調するものでした。彼らが信じるこれらの価値観は，普遍的な妥当性が見られ，キリスト教社会の発展には不可欠なものとなりました。この強調の仕方は，のちに「平和教会（peace church）」として知られることにつながっていきます。ブレズレン派の大学は最初は若者のために意図されて作られましたが，それらは学びたいと考えるいかなる学生にも門戸を開いていました。ある大学では，ブレズレン派の学生の数以上に，ブレズレン派ではない学生の数が増えていきました。理事会や教員の中にもブレズレン派ではない人が入るようになりました。科学の時代という誘惑だけでなく，このような条件，つまり世俗的に認められる機関になることを希望する要望は，ブレズレン派ではない教員が数多くおり，そして排他的な考え方が表明されてもいませんでしたが，教化と責められないためにも自然と大学が独自の考え方を表明することをためらうようになったのでした。その結果は，例えば平和の伝統など，ブレズレン派の遺産という面で考えると，かなりの損失となりました。後者の平和の伝統に関して言えば，ブレズレン派の大学においては，私たちは完全な青写真を持ち得てはいません。いくつかの大学では，その記録すら完璧ではありません。さらに言えば，それぞれの大学の記録は，同じような方法で記録されているわけではありません。例えば，統計上に卒業生の数を含んでいる大学もあれば，含んでいない大学もあるのです。それらの記録はほとんど比較することが出来ないでいます。もしも私たちが，シビリアン・パブリック・サービス（Civilian Public Service），つまりブレズレン派の大学の伝統を踏襲していると考えられる非戦闘員の奉仕（Non-Combatant service）を選んだ学生の数を付け加えるのであれば，10～25パーセントの数字になるであろう（ここには農業に従事した数は含まれてはいません）。このような記録によって，大学が教化を試みていると責められることはほとんどないでしょう。実際に，ブレズレン教会の教育者の中には，様々な考え方が認められる中で，大学が実際にブレズレン派を名乗ることができるのであろうか，と考えるものも出てきています。どんな人や機関でも，真実の全体像を捉えることは出来なく，そのことを客観的と見誤るような最も曖昧で危険であるという，ある種の教化が起きていたために，使徒ペテロのように客観的なものはない，ということが数多くの学生にとっては明白になっています。ある種の教化が，教会に

よる方が純粋で世俗的な機関よりも起きている，と思っているのです。

最近マンチェスター大学で開催されたブレズレン派の大学の代表者ならびにブレズレン教会の教育者の会議において，ブレズレン派の大学へ要請された内容は，キリスト教という枠組みの中で，私たちはこれまで考えられてきた中でも最善なものとして重要なブレズレンの理念と教義を保持しているが，しかし私たちは率直に，実践や解釈においてなすべきことをなしてこなかったことを認めています。さらには，私たちはブレズレン教会や他の教会において専門家のみならず一般の方々にも知識を伝え，そして訓練をすることに責任を感じます，とも言っています。これらの事実について深く熟慮することは，ブレズレン派が私たちの父なる神の主張を断念せずに欲するのであるならば，私たちは遺産を後世に伝えるためにも，更なる意識的な努力をする必要があるだろうし，少数派の立場を守れるように十分に独立心を持って考えることが出来る人を育てていかなければならなりません。また彼らが自らの意思で平和の証言を身にまとうことが出来るよう，大いに教会のために献身して彼らを鼓舞しなければならないでしょう。

ブレズレン教会が支援する大学では，必ずしもブレズレン派の教会員である必要はないのですが，教員の大多数は，もしもブレズレン教会が彼らを次世代の遺産の一部になることを期待するのであれば，重要とされるブレズレンの基本原則に徹する必要があります。この会議では，全ての教員は弁解なくキリスト教徒であり，大多数がブレズレンであるべきだとさえ言ったのでした。

もしもブレズレン教会が平和教会になることを望まないならば，それは単に歴史的なものになります。もしもブレズレン教会がその宗教的な教えという妥当性の中にまさに信念が存在するのであれば，カリキュラムの中で，学生は平和の哲学を学ぶ機会があるべきだということになるでしょう。私が知る限りでは，どのブレズレン派の大学でも行われておらず，ただブレズレン派の歴史の一部が扱われているに過ぎません。全ての大学が後者なのです。もっとも先端を行くクエーカーのある大学では，絶対平和主義に関する基本的な哲学というコースが哲学科で提供されています。そのテーマは，神話や合理主義，科学，実用主義など様々な角度から成り立っています。なお，このコースは必修ではなく，教化には当たりません。

幾つかの大学学長やブレズレン教会の教育者の発言を調査してみると，平和教会こそが，他の宗派以上に戦争の原因を学ぶ責任があり，平和のために必要な状況をもたらすために出来ることをする責任があると，自分達の役割として確信する割合が増えていることが読み取れます。私たちの大学がこの問題に取り組むために活用した調査によれば，大多数が主として社会科学に依拠していることも伺えました。社会科学を強調する際に，学生はある社会診断によって示された進展に必要な線引きに従っているのです。社会科学の後年の危機は，歴史における長いモノの見方の必要性を提示し，また望ましい目標を得るための技術に関するより良い知識だけではなく，より良い物の見方が必要とされるに至ったのです。リーダーはスペングラーが考えたように，歴史に関してコペルニクス的転回を果たすことが期待されていると言っても良いかもしれません。しかし，長いモノの見方をするということは，今という時代を解釈するリーダーにとって間違いなく不可欠なことなのです。ヌイ博士は，意味をなす歴史こそが普遍的な歴史なのだ，とさえ言っているのです。彼は恐らくはその大いなる重要性を喚起するために大げさに言ったのだと思います。現在では，ブレズレン派の大学の多くは，導入の科目として，文明の歴史を設けています。

また，現代史や同時代史の科目も設けています。全ての大学では，歴史学科か政治学科において国際関係論の授業を設けています。ある教員は，国際関係論の領域において，より多くの学生に関心を持ってもらうための人気が出る授業や，特段に高いスキルを持った学生のために，より高度な授業などを設ける必要性を指摘しています。昨年，マンチェスター大学では，「永続的な平和の基礎（Bases of Enduring Peace)」，と銘打った授業が導入されました。この授業では，心理的，経済的，政治的要因を扱います。その授業は，シラバスの著者であるダン・ウエスト（Dan West）のリーダーシップのもとグループ・ディスカッションで展開された授業でした。その授業は今年も続けて開講されます。今回は歴史学科，経済学科，社会学科，心理学科の教員が担当し，私はその集団の長として別の学科の教員とともに取り組みます。このような授業は数多くの可能性を秘めており，国際関係論における諸問題を単純化しないのに役立つでしょう。戦争が始まってから，幾つかの大学では，ブレズレン派の若者がこの種の奉仕活動に従事することを見込んで，社会的復興や社会的リハビリテーションの授業が追加されました。復興には長い歳月を要するので，より多くの大学がこのような性格を持った授業を導入するのは有益となるでしょう。

人は重要な家族という単位や小さなコミュニティーなどという比較的小さな次元において，全くもって上手に運営出来ていない時，ましてや国際的な規模での人間関係の技術に長けることなど期待されないかもしれません。アーサー・モーガン（Arthur Morgan）が指摘するように，基本的な人間の文化は低成長の文化であり，まさに頂上に君臨する権力によってなされる社会悪があるという考えは，いかに魅惑的であったとしても，神話に過ぎないのです。第一次世界大戦という非常に多くの力を必要とした後でも，人間関係の現状は，精神的な分裂や脱力感を除いてはほとんど何も変わらなかったのでした。政府や科学は，文化の根底ではなく，その果実であることを想起させます。その根底は，家族や小さなコミュニティーで生まれる意欲，動機，習慣，作法という重要なものの中にあるのです。現在，ブレズレン派の全ての大学が家族に関するコースを持っており，中には都心社会学だけではなく，地域社会学のコースを持っています。また，中には人種関係や様々な形態の経済的，宗教的な緊張関係を扱うという現在の社会問題に関するコースを設ける大学もあるほどです。

大学の中には，会合や教員と学生による共同委員会をこのような問題を議論するために活用する大学もありました。ベサニー神学校では，年に五，六回は学校全体で集まり，会合を開きます。会合は朝８時から正午まで続きます。教員は会合で報告を行い，その後議論のリーダーが学校全体を束ねて議論をリードしていきます。これまでの会合では，私たちブレズレン派の遺産，平和のための聖書の基礎，キリスト教の哲学，広がる軍事訓練というテーマがありました。

全ての大学で，チャペルを使い特別ゲストを呼んで戦争と平和に関する問題を扱っていました。全ての大学は同様に，国際問題をゲストを呼ぶ際にも大学が支援する，「学生キリスト教運動（Student Christian Movement)」や「友和会（Fellowship of Reconciliation)」のような学生団体に任せっきりになっていました。

大学の中には，他の平和教育の機関と連携する大学もありました。その多くは国際関係に関するクエーカーの研究所と協働していました。マンチェスター大学は，「アメリカン・フレンズ・サービス・コミィッティー（American Friends Service Committee：AFSC)」に，キャンパス内に国際関係研究所を設立する手助けを依頼しています。ラ・

バーン大学は何度かキャンパス内にAFSCの臨時ホイッター研究所を持っていました。クエーカーはこの仕事に長年の経験があり，彼らが提供する研究所は質の高い研究所として知られていたので，ブレズレン派の大学は，恐らくは彼らと協働し，近くの研究所で開催される会合に教員や学生に出るよう励ますことしか出来なかったかもしれません。また大学は，クエーカーが関われない場において，「ブレズレン・サービス（Brethren Service）」にブレズレン派による研究所を幾つか設立するよう依頼していました。

将来計画の際に出てきた中に，平和を作り出すための技術やプロセスに関するカリキュラムを持つ平和学のコース開設がありました。この可能性を考えた大学学長は，「私たちはさほど注意深くこの上級者向けのコースに取りかかったわけではないのだが，経営者と労働者の間で行われる産業会議で展開される技術については考えていました。恐らくは国際会議のプログラムで使われる技術，交渉，プロセスも使えるかもしれない。神学校の教員からは，私たちのワークキャンプで使われる様々な種類の緊張を和らげる際に学生も参加して行うプロジェクトも参考になる」と言っていました。

別の示唆は大学がプロパガンダの分析を行い，新聞記事を科目のテーマにするのが良い，というものでした。

現在試みられており，将来予定されているアイデアは多くの可能性を示唆しています。しかしながら，それらは有益でありますが，人間が何をなすべきなのかを知っているという事実は必ずしもその知識に調和して行動する意志を有することを意味しないのです。つまり，危険はこれだけで十分であると考える際に起きるのです。ヌイ博士は，「直感は理性よりも多い行動の領域を処理するということを想起させる。また，純粋で直感的な宗教的な信仰は考える科学や哲学よりも効果的な人間の手段なのである。行動は信念を伴うが，知識を伴わないのである」，と言いました。トゥルーブラッドは，「私たちに文明化された生活は繁栄しないし，力強い倫理的な信念なしには，生存することすら出来ない」，と警告しています。重要な問いは，いかにして身の回りでよろめいている現代の人間が，再び自身の生活の尊厳とどこにいても仲間の生活の尊厳の両者を感じ取ることが出来るように，現在の神のもとで生き生きとした信仰を保持出来るのだろうか，ということなのです。

私たちが，若き学生に人生の目標を思い描かせ，教育における精神の落ち着きを取り戻せるようにするため，ブレズレン派の大学で活用が可能な資源を省みるならば，宗教学，哲学，倫理学の領域や，社会科学，礼拝，そしてまさに宗教が生きている教師との個人的な関わりを通して精神的な成長を高める機会など，機会は至る所にあると言えるのです。ただ，それらの可能性を実現するには至っておらず，また私たちが持っている利点すら活かせていないのです。私たちは博識の学生や役に立つ市民や宗教的な実践家を輩出してはいますが，深い知見や精神的な力を持つ学生を輩出はしてはいないのです。私たちは学生に，もしもあなたが来たくて私のところに来るならば，あなた方の永遠さが失われないように，あなたがたのねじを巻くつもりです，と言った「デーニッシュ・フォルワス（Danish Volkschule）」の創設者のようには決して言えないのです。なぜならば，私たち自身が精神的な力を欠いているからです。

このようなより良く統合された人間を育て，そしてより積極的なリーダーシップを発揮する人間を育てるという必要性は，既にハワード・ブリントンとアンナ・ブリントンというクエーカーの教育者によって認識されているのである。彼らは「ペンドル・ヒル（Pendle Hill）」で通常の学校よりも充実した新しいタイプの学校を目指し，むしろ精神的な力の磁

場となるような有機的なコミュニティーであり結束の固い親交の場を設けていました。ハワード・ブリントンは，子ども時代には教育は伝統的な段階で必要であるが，しかしながら，若者にとって大学という場は理性に基づいて訴えかけなければならないと指摘をしています。このようにして，学生が宗教的に成熟し，人生のあらゆる意味に答えるには理性や科学だけでは不十分であることを発見するにつれて，学生の教育が分析というよりは知識の総合に向かい，また専門化というよりはむしろ統合化に向かい，数多くの事実を吸収するというよりはむしろ人生の意味や目標を感じとることに向かい，そして思索や研究というよりはむしろ洞察力や熟考に向かうことになるのです。これらの考えに調和して，ペンドル・ヒルは学校教育の徹底さと自発性と自由の雰囲気や，省察や精神的な活動に割り当てられた十分な時間を組み合わせようと努めています。その重要な哲学は，真の教育とはチャペル，学生寮，学びの一体化を要求するのだ，という哲学なのです。実際に手を使う技術や奉仕や，魂の鼓舞は心の努力に付け加えられるべきです。学校は人種間ならびに国際的な関わりもあり，職員を含めて全てのコミュニティーのメンバーはコミュニティーの運営を共有しているのです。そこでは成績評価がなく，学位も授与されませんが，学生一人ひとりが何かしら創造的な作業をするよう励まされ，そして求められているのです。

そこで，もしもブレズレン派が平和教会として認知されることを引き受けるのであれば，ゆえに学生を未来の平和への指導者たらしめるようなプログラムを開発する責務を負うことを意味するのです。私たちの研究に照らして，リベラルアーツの大学は精神的なリーダーシップの開発のために存在するような状況を作り出すということに，最も強調点が置かれるべきです。これには下記のことを必要とします。

⑴教員の選考に当たっては，学術的に優れた資質を有するだけではなく，精神的にも感受性が豊かで意識が高い者
⑵個人だけではなく社会についても人生の意味や目標に関する問題を考える機会を学生に提供する
⑶人類の生に関する普遍的な基本原則や，偉大なる宗教的な伝統に裏打ちされた理想的な道徳の基準
⑷イエス・キリストの倫理的な教えから得られる社会的な含みを学ぶ機会
⑸精神的なリーダーシップの準備として，学生の信仰の生活の向上が基本的に必要だと大学に認識してもらうこと
⑹社会関係の発達においては，個々の家族や小さなコミュニティーが担う役割が重要であることを認識すること
⑺歴史を長期的な観点で考えること
⑻戦争と平和の諸問題に対する，政治的，経済的，心理的な研究法を含み，統合する国際関係論のコースを提供すること
⑼平和教会の基本的な哲学や平和的に生きるための技術や手続きを学ぶ機会を提供すること

リベラルアーツの大学において上記のような問題は，精神的なリーダーシップのためにはペンドル・ヒルのように，より柔軟なタイプの特別な学校の発達によって補足されるべきです。マンチェスター大学の会議では，このような新しいタイプの学校が，他校のキリスト教教育の最前線の実践とともに議論されました。中には，ブレズレン派の学校が，本質的には宗教的な基盤を持った成人教育センターになると述べる者もいました。それは，既に設立されている「デーニッシュ・フォーク・スクール（Danish folk school)」,「ペンドル･ヒル」,「ヨーロピアン･ニュー･ライフ･センター（European New Life Center)」の

ような実験学校で実現された価値を組み入れることになるでしょう。しかしながら，主たる目的は，この現在にあって普遍的な妥当性や特段に重要であると感じられるブレズレン派の生活様式を再活性化し，再解釈することです。そのような学校こそが，通常の高等教育機関よりもさらに精神的なリーダーシップを生み出しうるかもしれません。それは何かを補足することを期待され，リベラルアーツの大学の代わりにはならないかもしれません。

このような傾向は，本稿の冒頭部分で提示した思慮深い分析家たちによって到達した結論とぴったりと同じになるでしょう。ヌイ博士が述べていたように，社会的な出来事というのは，人間の心理的な進化に寄り添うのである。個人の魂において深く過去の転換の結果でないものというものに，永遠であるものはないのです。この転換というものは全ての努力の目標になる必要があるのです。

もしも私たちが本稿の結果をおさらいするのであれば，このようにまとめることが可能です。私たちの社会は主として目標を失ったために分裂状態にあり，物理的な世界を制御しようとする技術と道具に関する知識の存在ゆえに，人間関係を理解し制御しようとする私たちの能力を凌いでいるのである。大学は，あるべき目標を発見する能力に長けたリーダーを養成することで，いま何が欠けているのかを社会に対して訴え，そして学生をそのような方向へと誘うように鼓舞することによって，このような弊害（malady）を正すような努力をしていかなければならないのです。このことは，このような問題を可視化する宗教学や哲学や倫理学，そのほか関連する領域に再び光を当てなければならないことを意味します。また，リーダーとなる学生には，人間関係に関する長期的な視野や技術に長けてもらわなければならないのです。これには，長期的な歴史観に裏打ちされた，国際関係における平和を作り出す技術の学習も含まれます。近年になって，ブレズレン派は主に平和と戦争の問題に対する社会的なアプローチへの応答をしました。平和を作り出すリーダーの養成の発展の要素としては，将来の計画には，宗教の重要性により大きな重点を置くことになるでしょう。それは，より統合された個人の必要性とその内部から始めるという重要性を強調しています。恐らくは，もしもブレズレン派の教育者たちがさほど躊躇なく，よく大規模な学校で用意されるような，いつも通りの流れに沿って着手し，私たちの世代の要求を最も満たすような実験的な取り組みを進んでするのであれば，私たちはこれまで以上に我々の宗教的な直感や判断を信頼することにつながり，最終的にはなしとげられた結果というものは，非難ではなく承認を得られるということを後に発見することになるでしょう。